

多自然川づくり取り組み事例

タイトル：千曲川中流域における自然再生事業の効果検証について		
水系/河川名：信濃川水系/千曲川	河川分類：大河川	
河川の流域面積：7163km ²	整備計画流量：4000m ³ /s(W=1/30)	セグメント：2-1
事業：環境整備	事業開始年度 平成17年度	
目標設定：定性的	段階：C(モニタリング・評価時)	
課題・目的(主な)：礫河原、砂州・中州の保全・再生・創出、外来種対策		
工法(主な)：掘削(高水敷)		
配慮事項(主な)：委員会、協議会等の開催		

背景・課題、目標設定

〈背景〉

千曲川中流域では昭和30年代から始まった砂利採取等の影響により、低水路部と高水敷部の比高差が拡大した。これにより冠水頻度の減少に伴う砂礫河原の樹林化、外来植物の侵入・繁茂が起きている。そしてかつて有していた砂礫河原環境が、消失・減少といった状況に見舞われている。そこで千曲川河川事務所では、本来の砂礫河原環境の保全・再生を目標に自然再生事業に取り組んでいる。

〈課題〉

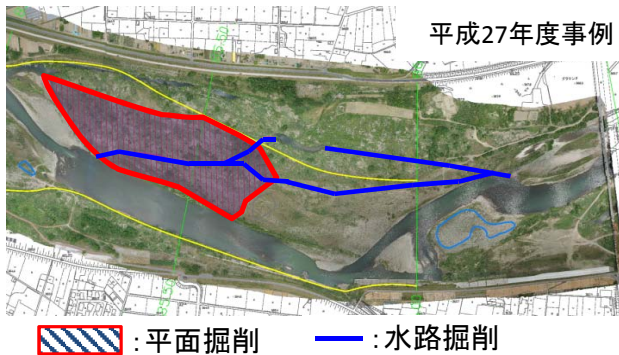
自然再生事業として主で行っているのが高水敷部の河道掘削である。しかしこれには大量の土砂が発生し、土砂処分が新たな課題となってきた。

〈目標〉

平成27年度に上記の課題解決の手法として、試験的に流路跡を利用した水路掘削を行った。水路掘削の有効性として、①掘削により発生する土砂量の削減。②洪水後、水路周辺の攪乱を頼りとした砂礫河原再生。を期待した。

掘削6ヶ月後(平成28年9月)に出水が起きたが、出水後の状況を確認し、予測段階時での状況と実際の状況について比較・検証し、水路掘削の効果や可能性を検討する。

取り組み内容・対策例



- ①「平面掘削」+「流路跡(水路)掘削」を実施。
→従来の平面掘削のみと比較した場合、土砂発生量を約1/5に縮減。(掘削土量万16m³→3.2万m³)
- ②復元流路幅は、現況程度(幅5m、深さ1.5m)とする。

◆平面二次元河床変動計算では流路跡周辺部での攪乱が確認された。→実現象では？

モニタリング結果、アピールポイント、今後の対応方針



備考

問い合わせ先 北陸地方整備局 千曲川河川事務所 調査課
電話番号 026-227-9434